女子小学生向けファッション雑誌からみるジェンダー・ステレオタイプの表象－『ニコプチ』『キラピチ』『Ane ひめ』の 3 誌から

遠藤　彬

1. 研究背景と目的

現代日本におけるファッションは、「現代社会の特性、流行現象、自己概念の獲得、社会的相互作用の促進・抑制、ボディ・イメージなど、ジェンダーと深い関わりを持つ」と多くの研究で示唆されている。

現在までに若者向けファッション雑誌などでは、ジェンダー研究と結びついた雑誌研究が行われている。しかし、女子小学生向けファッション雑誌(以下女子小学生向け雑誌)では行われておらず、それ故にジェンダー・ステレオタイプの表象の実情も明らかになっていない。

よって本研究では、女子小学生向け雑誌を対象に CDA 観点からテキスト分析と女性文末詞調査を行い、言語表現を通じて現代日本における、女性へのジェンダー・ステレオタイプが、女子小学生向け雑誌においてどのように表現されているのかを明らかにする。

2. 研究方法

【調査資料・期間】「ファッション」を中心に現在も刊行している女子小学生向け雑誌、『ニコプチ』・『キラピチ』2020 年 2 月号から 12 月号、『Ane ひめ』2020 年 3 月号から 10 月号とした。CDA 観点からのテキスト分析と女性文末詞調査は同資料・同期間で行った。

【分析方法】テキスト分析は、①編集者(書き手)の「声」が直接出てくる「中見出しやリード文、やや大きい文字の説明文」から、編集部が想定する「読者(女性)のイメージ」の用例を抜き出して分析、②編集部(書き手)が用いる言語表現から、編集部と読者の関係性の分析を行った。女性文末詞調査は、女子小学生向け雑誌の記事中の文章を読み込み、女性文末詞を抽出した。そして女性文末詞ごとに分類、集計をしたデータと結果をもとに分析を行った。

3. 研究結果

【テキスト分析①】全体として編集部が想定する「読者のイメージ」は、従来の「女性らしさ」と一致していた。

【テキスト分析②】『ニコプチ』『キラピチ』の編集部は、読者の会話スタイルに寄せることで、読者の願望を代弁し、また、少し上の先輩や友達が助言しているような印象を読者に与えていた。他方で、その親しみある人間関係に、編集部の印象操作が隠れていた。

【女性文末詞調査】女性度の高い女性文末詞は、『Ane ひめ』では残存していたが、『ニコプチ』『キラピチ』ではほとんど使用されていなかった。

『ニコプチ』『キラピチ』は、編集部(書き手)が読者と「対等な関係」を築きたいという意識と、読者に編集部(書き手)が年配の人や目上の人であるという印象を抱かせないようにするために女性度の高い文末詞を用いていないと分析する。『Ane ひめ』は、「女性らしさ」を強く推奨する背景から他 2 誌よりも女性度の高い文末詞が使用されていると分析する。

4. 結論と考察

編集部(書き手)による、従来の「女性らしさ」に則したジェンダー規範的表現が、女子小学生向け雑誌でも見られることが明らかになった。そして書き手の想定する読者の年齢が下がるほど強く表現されていた。これは、ちょうど読者の言葉の基盤が造られる時期であることと、購入者である、すでにジェンダー規範に縛られた大人も読むことへの配慮によるものと考える。

また、『ニコプチ』『キラピチ』では、編集部が読者の会話スタイルに寄せることや、女性度の高い文末詞を使わないことで読者に限りなく近づき、少し上の先輩や友達が助言しているような印象を読者に与えていた。以上のような編集部(書き手)の語りかけによって、編集部と読者のコミュニティーが形成されていた。このコミュニティーは、大人である編集部と子どもである読者の関係性である以上、支配・主従の構造があると考える。また、このコミュニティー内での相互ないし編集部(書き手)からの一方的な言葉の投げかけは、女子小学生の中にジェンダー・ステレオタイプを構築させる可能性、さらに大人から子どもへのジェンダーの再生産が、雑誌の中で起きている可能性がある。

参考文献

1. 高田葉子, 「アイデンティティとファッションの関連性についての考察」, 戸板女子短期大学研究年報第 56 号, 2013
2. 泉子・K・メイナード, 「クリティカル・ディスコース分析：若者向けファッション雑誌における語りかけと性差」, 『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性』, くろしお出版, 1997
3. 劉雨瞳, 「『non-no』と『MEN'S NON-NO』から見た若者向けファッション雑誌における言語表現」, Core Ethics, 2017